

島生み（その二） その一

ここに二柱の神議（はか）りたまひて、「今、吾が生める子ふさわず。なほうべ天つ神の御所（みもと）に白（まを）さな」どのりたまひて、すなはち共に参（ま）る上がりて、天つ神の命を請ひたまひき。ここに天つ神の命以ちて、太ト（ふとまに）にト（うら）へてのりたまひしく、「女（おみな）の先立ち言ひしに困りてふさはず、また還り降りて改め言へ」どのりたまひき。

／解説／

右は伊耶那岐・美二神の失敗に続き天つ神へお伺いを立てる話であります。これを言霊学の教科書としての文章に置き換える必要があります。「太卜に卜へて」とは「布斗麻邇の原理に則って」という事です。そこで右の文章は左の通りとなります。「母音を先に、父韻を後に発音しては現象子音を生むのにふさわしくなかった。だから初めの心の先天構造の天津磐境の原理に帰って検討をしよう。そう気がついて改めて布斗麻邇に照らし合わせてみると『母音を先に発音するのがいけなかった。また後天現象の立場に帰り、再びやり直して今度は父韻を先にし、母音を後にするやり方にしよう』と気付いたのでした」となります。

太古、日本人の祖先が心と言葉の完全法則である言霊布斗麻邇を発見・自覚するまでには幾多の苦心と紆余曲折があったことでしょう。右の古事記の文章はその苦心談の一つと考えることができます。そして行為がうまく行かず、迷った時には早く出発点にもどり、出直してみる事が大切であると教えているようにも思えます。尚「太卜に卜へて」を辞書で見ると、「神代に行われた一種の占法。鹿の片骨を焼き、その裂けた骨のあやによって吉凶を占ったもの」とあります。これは二千年前、崇神天皇の御宇、言霊原理が世の表面から隠されて以来、物事を心の原理に基づいて判断する事が出来なくなった為に、その穴埋めに用いられた占（うらない）であります。うらないの語源は裏絢（うらな）うで、現実と裏（心）をより合わせて、物事の先行きを決める、という事であります。